氏　　名　山崎浩司（やまざき ひろし）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第307号
学位授与の日付　平成18年1月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科環境相関研究専攻
学位論文題目　解釈主義的社会生態学モデルによる若者のセクシャルヘルス・プロモーション：性的に活発な高校生のコンドーム使用促進のための要因探索および対策・援助検討型研究
論文調査委員　（主査）教授 C.ベッカー　教授 高橋由典　教授 山田孝子

論文内容の要旨

本論は，日本の性的に活発な男女高校生の性の健康増進を目指すセクシャルヘルス・プロモーション研究（または性の健康行動科学）である。年間4万件を超える10代の意図しない妊娠や，1990年代半ばから増加を続ける性感染症罹患の両方を同時に防ぐべく，コンドーム常用の促進を検討した。この検討は，対象集団がいかにコンドーム[不]使用に至るのかを解明する要因探索分析と，その解明されたコンドーム[不]使用の要因を，具体的にどのような対策によって活用あるいは解消できるのかを考察する対策・援助検討分析の2段階で行われた。

第一章では，セクシャルヘルス・プロモーションの先行研究については，個人の知識や認識を増強することのみで行動変容を目指す個人認知モデルが主流だったが，本論文では，環境変容による個人の認識と行動の変容を目指す社会生態学モデルを採用した。さらに，このモデルの難点である環境決定論的傾向を回避すべく，シンボリック相互作用論と修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を導入し，解釈主義的社会生態学モデルという新たな分析視角を設定した。

データは，西日本A県・B県の性的に活発な男女高校生83名に対し，フォーカス・グループ・インタビュー及び半構造化個人面接を実施して，共同研究者とともに直接・間接に収集し，修正版M-GTAを応用して要因探索分析を実施した，という方法論を，第二章で詳しく説明している。

第三章から第五章にわたり，その調査分析結果を紹介している。まず，対象者が同性ピアや交際相手との相互行為を通して，コンドーム不使用に傾倒してゆく過程が明らかになった。その過程は，男子が強迫的に射精に直行しようとする性交渉≪オーガズム・エクスプレス≫を確立するプロセスであった。男子は，小学校時代からアダルトビデオ等の性メディアを手引きに，同性友人間で＜ピアのメディアによるピアのための性教育＞（＜メディピアの性教育＞）を展開し，膣外射精が恐らく有効であり，相手に対して優越感をもてる避妊法であるのを学習する。それでも初期の性交渉では妊娠不安からコンドームを使用する者も多いが，[不]使用の決定権は＜男性主体の関係性構築＞により男子が掌握する。

交際関係が進行するにつれ，性交渉そのものの刺激が薄れはじめ，男子はコンドーム装着時にペニスが萎えるなどの経験をし，性器結合及び射精に至れない焦りを覚える。そこで＜男性主体の関係性構築＞を背景に，コンドーム使用時の不快感を相手に受容させ膣外射精に切替える。それでも妊娠が不安な女子は，認知的不協和な状態を脱するため，自分の身体は妊娠しにくい体質なので避妊は膣外射精で十分であるとの認識を醸成し，＜膣外射精のデフォルト化＞が確立する。それにより，≪オーガズム・エクスプレス≫が常態化する。

次（第四章）に，対象者が家庭・学校・地域社会等の環境における相互行為を通して，自分が性的存在であることについて各環境が受容的か否かを査定する過程≪性受容性診断≫が，コンドーム[不]使用に間接的に作用している可能性が示された。対象者は，彼らが性的存在であることを，親，教員，地域住民が受容していると査定（＜プロセクシャル査定＞）すれば，コンドーム使用促進などの助言に耳を傾けていた。しかし，非受容的と査定（＜アンチセクシャル査定＞）すれば，助言に聞く耳をもたなかった。ピア関係や交際関係以外のこれらの社会的環境は，概ね＜アンチセクシャル査定＞されること

が多かった。コンドーム入手・購入の場となる地域社会も例外ではなく，警戒すべき外界とみなされており（<外界への警戒>），コンドーム入手・購入に対して阻害的に作用している傾向がうかがえた。

第五章では，以上の要因探索分析の結果を踏まえ，コンドーム・プロモーションを可能にする対策・援助の検討を行った。対象者へのコンドーム使用促進は，①大学生ピア等を活用して<アンチセクシャル査定>や<外界への警戒>を解消する，②メディア・リテラシー教育によって，現在の性メディアが量産する，[膣外]射精（オーガズム）こそが性交渉を成立させるといった画一的な性交渉イメージが，実は多様な性交渉のあり方の1つでしかないことの気づきを促し，≪オーガズム・エクスプレス≫を解体する，③アダルトビデオ等の性メディア制作者側に働きかけ，コンドーム装着の規範化及びエロス化のモデルを生み出してゆくことで≪オーガズム・エクスプレス≫を解体する，といった環境変容によって実現される可能性が示唆された。

結論の第六章では，本研究の限界と意義について述べている。介入の実践，理論，方法論の限界は，本論文の中でも認められているが，それらを今後さらに洗練してゆく価値がある。また， 新たな性交渉のあり方の具体的な模索などを，今後の研究課題として要請するものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，近年，日本の10代の若者の間で，無視できないほど件数が多い意図しない妊娠及びその典型的な帰結である人工妊娠中絶，そして性感染症の罹患を同時に防ぐ方策を検討すべく，彼らのコンドーム[不]使用の要因を探索し，それに基づいた環境変容の素案を提示したものである。研究領域は，セクシャルヘルス・プロモーション研究または性の健康行動科学で，社会学や疫学にまたがる学際性を有するうえ，健康増進という実際的な貢献が目指されており，学際性や応用性を称揚する人間・環境学研究科で行われるべき研究である。

本論文で分析視角として設定された解釈主義的社会生態学モデルは，健康行動科学で発展した社会生態学モデルの限界を，社会学で発展したシンボリック相互作用論を導入することで克服している点でオリジナリティのあるものである。社会生態学モデルの環境決定論的限界と，行為者の解釈的視点を十分に把握できない限界は，社会的相互作用と解釈とを重視するシンボリック相互作用論によって補完されている。解釈主義的社会生態学モデルは，個人認知モデルから社会背景や文脈に注目するモデルへと重点が移りつつあるヘルスプロモーション研究の理論的潮流を能く活かしているだけでなく，それをさらに発展させることに寄与するものである。

また，データ収集法として採用されたフォーカス・グループ・インタビュー及び半構成的個人面接と，データ分析法として応用された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは，本論文で十分な理解の上に使いこなされており，学位申請者がこれらを後学の研究者に対して指導できることを明示している。従って，本論文及び学位申請者は，社会医学や社会学にまたがる質的調査研究の方法論的発展にも寄与するものと考える。

日本における性的に活発な男女高校生のコンドーム[不]使用の要因は，本論文の分析によれば，男性が強迫的に[膣外]射精に直行できる性交渉――≪オーガズム・エクスプレス≫――の確立と，家庭・学校・地域社会に対する対象者の≪性受容性診断≫（彼らが性的であることを対象環境がどれだけ受容しているか否かの査定）にあるという。分析過程や解釈の根拠は明確だが，データ収集と分析の枠組が異なることから来る分析の限界も認められる。≪オーガズム・エクスプレス≫や≪性受容性診断≫といった中核概念を中心に構成されたグラウンデッド・セオリーは相当の説得力を持っているが，これらを構成する概念のいくつかは収集されたデータを十分に反映したものではなく，先行研究の結果などを解釈的に当てはめることによって補っている。この点は，データの制約上避けがたい点ではあるにしろ，今後の研究によって補完されるべきと思われる。しかし，全体の分析結果は整合性を持っており，上記の難点によってその整合性が脅かされるものではない。

コンドーム[不]使用の要因探索によって解明された知見をもとに提示された環境変容の素案は，使用促進可能要因を促進し，不使用促進可能要因を解消しようとするものであり，既に若者に対するセクシャルヘルス・プロモーションの現場で実践されているものも含めて，実現可能と思われるものが提示された。中にはその可能性が不確かだと予想されるものもあり，今後の研究においてその実践と評価が必要であると思われる。しかし，大学生ピアなどを活用することによって，対象者がピアや交際相手以外の対象に示しやすい性的自己の否定に対する警戒を解くことや，アダルトビデオなどの性メディアに関

するメディア・リテラシー教育を実施することで，膣外射精や性器結合こそ性交渉であるといった量産される一元的な性イメージと，その帰結である≪オーガズム・エクスプレス≫を解体することなどは，現実性と実現性を有する対策であり，本論文の社会的意義が表れていると考える。

よって，

本学位申請論文は，博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成17年 10月21日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。